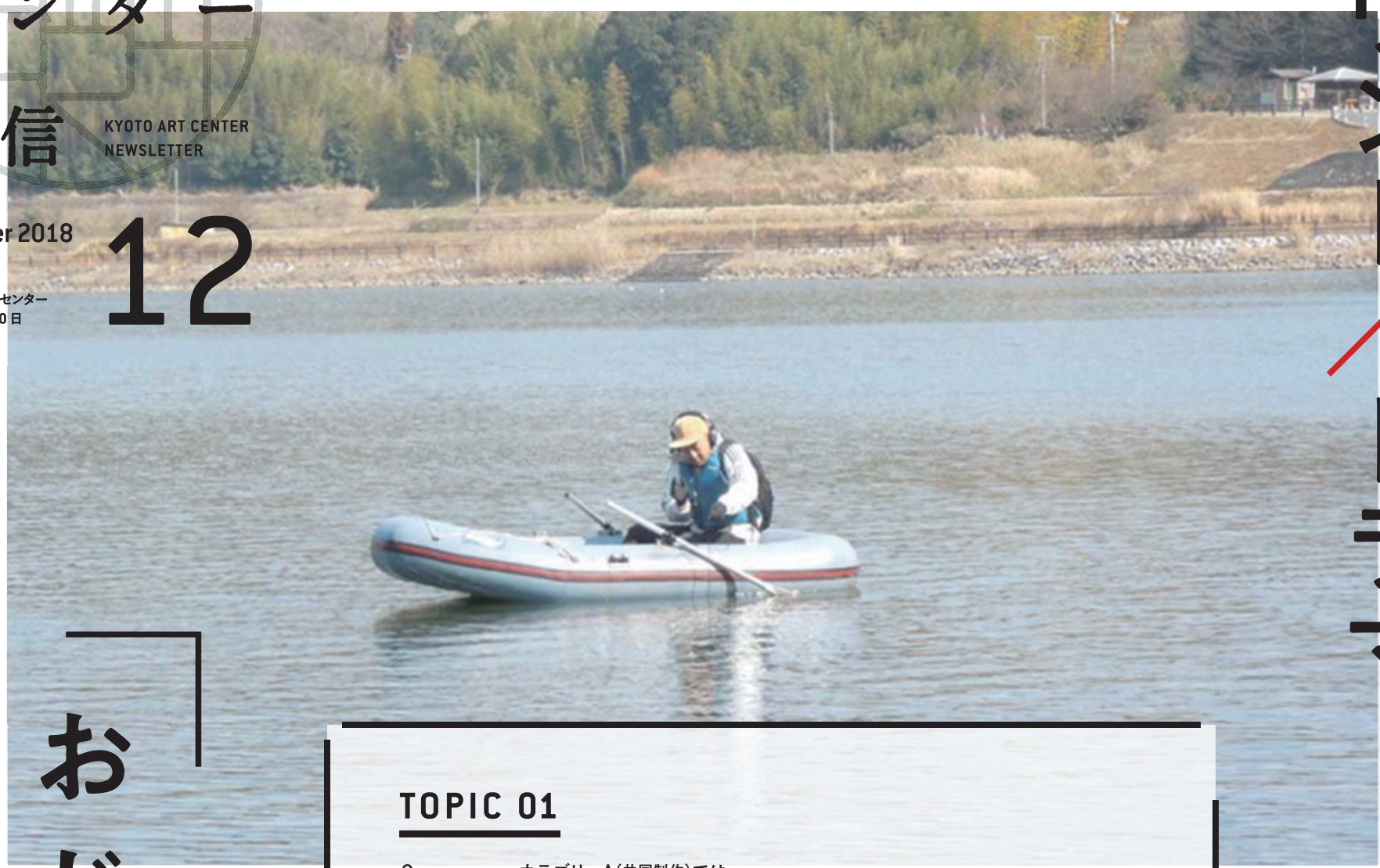
京都芸術センター通信
KYOTO ART CENTER NEWSLETTER
December 2018
Vol.223
12
発行｜京都芸術センター
2018年11月20日

荒木優光

サウンド／ドラマ「おじさんと海に行く話」



TOPIC 01

Co-program カテゴリーA（共同制作）では、
アーティストと京都芸術センターが共に公演の制作・発表に取り組みます。
2018年度は演劇・ダンス・音楽の分野から計5団体が選ばれました。
12月は、その中の一つ、音響作家の荒木優光による音響上演、
「サウンド／ドラマ『おじさんと海に行く話』」が行われます。

今回、荒木優光が創作するのは、音を主体とした上演シリーズの新作。作家の松原俊太郎のテキストを元に、これまでより虚構性の高い語りのレイヤーを加えた「サウンド／ドラマ」を上演します。

荒木は、「劇場的時空間」をテーマとした音の作品に取り組んでおり、その形式は劇場上演、展示、音源作品など様々です。2009年から継続している「劇場で音を聴く」という形式の上演シリーズでは、これまでに、松田正隆の戯曲テキスト『N市民』をベースに作成した音声作品『@アッチ&コッチ〜N市からの呼び声』(2009)のほか、生まれつき視覚障害のある人物へのインタビューを、その人物が生活する部屋で行い、その時に同時に鳴っていた音を空間ごとに記録した音声によって構成した舞台作品『パブリックアドレス-音場2』(2014)、また、男女のカップルとの日常生活や恋愛についての対話とカップルのデュエットをカラオケボックスで記録し、男女のコミュニケーションにおける溝とそこから生まれる笑いを抽出した恋話音声『男と女のビッグエコー』(京都芸術センター、2016)などを発表してきました。

これまでの上演シリーズでは、そうしたドキュメンタリーやフィールドレコーディングの手法を用いた作品に取り組んできた荒木ですが、今回の上演では新たな取り組みとして、劇作家・小説家の松原俊太郎に上演の元となるテキストの執筆を委嘱しました。つくられたテキストの虚構性を活かした「サウンド／ドラマ」の上演によって、より作り込まれた音の語りを探っていきます。気鋭のアーティストと作家が取り組む意欲作にどうぞご期待ください。

今回の上演は空間を伴ったラジオドラマのようなイメージとのこと。過去に作られ、再生される音（記録音声）とその場で生成される音（サウンドパフォーマンス）により時間が進められていきます。繰り広げられるサウンド／ドラマをお見逃しなく。　當間芽（アートコーディネーター）

これは、音響家・音楽家としての荒木さんとの出会いから継続して行なっている音を主体とした上演シリーズ（音響上演作品）のキッカケです。

これまで私が劇場などで作ってきた作品の中には、その時の風景音、あるカップルとの対話やデュエットなどを、ドキュメンタリーやフィールドレコーディングの要素が主軸でしたが、そんなこんなで３７歳になってしまったな、と思うようになりました。そこで、ジャンルとしてのテキストを元にした、より作り込まれた音の語りを探ってみようと思いました。

そこで、戯曲や小説の作品をもとにした「サウンド／ドラマ」という概念を構築していきたいと思います。

最近、やたら京都で松原さん関連企画がありますが、ではありません。

ちなみに、このチラシを作成したのは、松原さんにまず第一稿をいただいたところです。誰なのかわからない男が、女の子と隣の屋上で洗濯物を干している女と会話している、というシーンが、ポイントとなって立ち上がっています。これを音でやることになります。

松原さんには、こういう物語を書いて欲しい、という指定はせず、要素としてのやりとりを何度かしています。本番は 12 月の頭の週末なのであまり時間がないのですが、ようやく一人の間でタイトルが決まりました。

荒木優光「サウンド／ドラマ『おじさんと海に行く話』」
日時：12月7日(金)19:00
　　8日(土)14:00／19:00
会場：講堂
作：松原俊太郎
構成・サウンド：荒木優光
料金：一般前売2,000円／当日2,500円
　　学生前売1,000円／当日1,500円
主催：荒木優光、京都芸術センター
※イベント情報(P2)もご覧ください

Profile

荒木優光（あらき まさみつ）
1981年山形県生まれ。京都在住。音響・音楽家。サウンドドキュメンタリーやフィールドレコーディングなどの手法を用い、「再生」をテーマとした音の作業を劇場上演や展示、音源作品など形式の枠に留まらない活動を展開する。主な作品に、『sunroof〈代理シャウトのオーディオシステム〉』(2015)、音響上演作品『パブリックアドレス–音場2』(2014)、『Acoustic Device 騒音のための5楽章』(2016)など。記録にまつわる作業集団ARCHIVES PAY、バンドNEW MANUKEのメンバーとしても活動。

松原俊太郎（まつばら しゅんたろう）
1988年熊本生まれ。作家。神戸大学経済学部卒。処女戯曲『みちゆき』が第15回AAF戯曲賞（愛知県芸術劇場主催）大賞を受賞。戯曲『忘れる日本人』『山山』がKAAT神奈川芸術劇場と地点の共同制作作品として上演。戯曲『正面に気をつけろ』を地点に書き下ろし、アンダースローで上演。早川書房「悲劇喜劇」2018年1月号に小説『またのために』を寄稿。京都芸術センター主催「演劇計画II」の委嘱劇作家として戯曲『カオラマ』第一稿・第二稿を発表。

音響作家　荒木優光　×　作家　松原俊太郎

サウンド/ドラマ

EVENTS

各種イベント申込方法（別途記載のあるもの、共催事業、制作支援事業は除く）
催し名・住所・氏名・電話番号を添えて、ウェブサイト申込フォーム、TEL、FAXで事前にお申込ください。チケット窓口でも受け付けます。
※友印の公演は、京都芸術センター友の会のご招待券・ご優待割引対象公演です（制作支援事業は京都芸術センターチケット窓口取扱公演のみご優待。共催事業はご優待対象外）その他、友の会特典詳細についてはウェブサイトをご覧ください
※各種年齢別・学生料金は要証明書呈示

美術

セレブレーション
−日本ポーランド現代美術展−
オープン・リサーチ・プログラム
#2 1918年以降のポーランド前衛演劇
ポーランドの戦間期における前衛演劇についてのレクチャー。
日時：11月28日（水）19:00−21:00
会場：和室「明倫」
出演：エヴァ・チャプリンスカ（演劇研究家）
※無料・事前申込不要
※ポーランド語−日本語の逐次通訳あり

第3回京都学生アートオークション

プレビュー展示
会期：11月30日（金）−12月7日（金）
10:00−20:00
会場：ギャラリー南
※入場無料

オークション
日時：12月8日（土）
開場13:30 オークション14:00−16:00
会場：フリースペース
※申込方法等の詳細はウェブサイトをご覧ください

主催：京都学生アートオークション実行委員会、京都市
共催：京都芸術センター

演劇計画II-戯曲創作-
「S/F ―到来しない未来」
松元悠『カオラマ』展
会期：12月13日（木）−2019年1月6日（日）
10:00−20:00
※12月26日（水）−2019年1月4日（金）は休館
会場：ギャラリー北・南
※入場無料
出展：松元悠（リトグラフ作家）
戯曲：松原俊太郎『カオラマ』（第一稿・第二稿）
※Topic02（P4）もご覧ください

KAC Curatorial Research Program vol.01_青木彬
キュレーター・トーク
関西圏外を拠点に活動する若手キュレーターが、京都のローカルな問題と出会うことで、新たな視点でキュレーションを実践するプログラム。リサーチの経過とともに、2019年2月に開催する展覧会の構想をお話しします。
日時：12月22日（土）16:00−18:00
会場：フリースペース
登壇：青木彬（インディペンデント・キュレーター）
※無料・事前申込不要

伝統

みみききプログラム
#2 素謡の会「うたいろあはせ」友
第2回
観世流と金春流、流派による違いを聞きくらべます。
日時：12月18日（火）
受付18:00 開場18:30 開演19:00
会場：大広間（待合：講堂）
演目：〈観世流〉経正、〈金春流〉花月
出演：林宗一郎、田茂井廣道、高橋忍、山井綱雄、白坂信行
料金：前売1,500円／当日1,800円
※みみききプログラム共通の半券割引が利用できます

京都芸術センター叢書二 出版記念
「伝統芸能ことはじめ 番外編」
6年間にわたる講座をまとめた書籍の出版を記念したトーク。
日時：12月22日（土）
14:00−15:30（開場13:30）
会場：大広間
料金：無料
講師：小林昌廣（情報科学芸術大学院大学教授）
定員：70名（要事前申込）

TARO講座シリーズ
#5 三味線組歌ってなに?
〜楽譜から読み解く三味線古歌謡〜
日時：12月23日（日・祝）
14:00−16:00（開場13:30）
会場：大広間
講師：井口はる菜（関西外国語大学外国語学部講師）
出演：後藤愉香、鈴木由喜子、高橋要、林美恵子、林美音子、百武史子、吉田則子
曲目：「琉球組」「千代の恵」「早舟」「乱後夜」「晴嵐」
料金：無料
定員：70名
※予約申込可（当日参加はお問い合わせください）

明倫茶会

「泉扇忌−デュシャンに捧げる茶会にして展覧会（のようなもの）」友
9月30日（日）に予定しておりましたが、台風の接近に伴い延期となり、日程を変更して開催します。

【茶会】
日時：12月23日（日・祝）
13:00／14:00／15:00／16:00
席主：小崎哲哉（ジャーナリスト、アートプロデューサー）
本席：和室「明倫」
待合：ミーティングルーム2
内容：デュシャンにまつわる飲み物とお菓子と作品とお話
料金：1,000円
定員：各席20名（先着順／要事前申込）

【展示】
茶会に先立ちしつらいを公開します。
会期：12月21日（金）、22日（土）
10:00−20:00
会場：和室「明倫」
※入場無料・事前申込不要

音楽

Ensemble FOVE presents
『TRANS』友
Co-program カテゴリーA（共同制作）採択企画。
日時：11月27日（火）19:30
28日（水）15:00／19:30
会場：講堂
作曲：坂東祐大
出演：Ensemble FOVE（上野耕平［サクソフォン］、中川日出鷹［ファゴット］、伊藤亜美［ヴァイオリン］、安達真理［ヴィオラ］、地代所悠［コントラバス］、荒木奏美［オーボエ］ほか）
料金：前売3,000円／当日3,500円
主催：Ensemble FOVE、京都芸術センター

みみききプログラム
#1 明倫レコード倶楽部
「喜怒哀楽のレコードの旅」
［其ノ67］哀の会友
日時：12月1日（土）開場14:30 開演15:00
会場：講堂
料金：500円（1ドリンク付）
講師：いしいしんじ（作家）
※みみききプログラム共通の半券割引が利用できます

演劇

荒木優光「サウンド／ドラマ
『おじさんと海に行く話』」友
Co-program カテゴリーA（共同制作）採択企画。
日時：12月7日（金）19:00
8日（土）14:00／19:00
会場：講堂
作：松原俊太郎（作家）
構成・サウンド：荒木優光
料金：一般前売2,000円／当日2,500円
学生前売1,000円／当日1,500円
主催：荒木優光、京都芸術センター
※Topic01（P1）もご覧ください
※11月号掲載時から公演名と料金を変更しています

ダンス

MuDA衝突ダンスパフォーマンス
『立ち上がり続けること』友
Co-program カテゴリーA（共同制作）採択企画。
日時：11月23日（金・祝）、24日（土）19:00
25日（日）15:00
会場：講堂
料金：一般前売3,000円／当日3,500円
学生前売2,000円／当日2,500円
ペア5,000円（前売のみ）
チケット取扱：京都芸術センター、MuDA
E-mail：muda.reserve@gmail.com
主催：MuDA、京都芸術センター

建築

京都文化力プロジェクト2016−2020
「野外インスタレーション公募展」アーティスト・トーク&サポートスタッフ説明会
大賞受賞者のこれまでの活動や大賞受賞作についてお話しいただいた後、サポートスタッフの活動について説明します。登録は任意ですので、興味のある方はお気軽にご参加ください。
日時：12月9日（日）14:00−15:30
会場：ミーティングルーム2
※無料・要事前申込
主催：京都文化力プロジェクト実行委員会

ライブラリー

「あの人の、おすすめ本」
京都芸術センターに縁のあるあの人、この人からのおすすめ本をコメントとともに紹介します。今回は劇団ユニット「したため」主宰、KYOTO EXPERIMENT 2018事務局の和田ながらさんです。
日時：10月1日（月）−12月24日（月・祝）
10:00−20:00
※休室日：11月30日（金）
会場：図書室

明倫ワークショップ

京都芸術センター制作室で創作活動を行うアーティストによるワークショップ。（参加無料）

サファリ・P「『財産没収』稽古場見学」
日時：12月5日（水）15:00−16:30
会場：制作室8
定員：10名

シアターリミテ「大きな声で絵本を読んでみよう…初めてでも楽しい朗読、群読」
日時：12月8日（土）10:30−12:30
会場：制作室11
定員：10名
持物：タオル、水分補給できるもの
対象：小学生以上（小学生の場合は保護者同伴）
※動きやすい服装でお越しください

烏丸ストロークロック「【シニア向け】演劇の訓練を使って、感覚を広げよう」
日時：12月10日（月）10:30−12:00
会場：制作室6
定員：8名
持物：タオルなど身体の下に敷けるもの
対象：65歳以上
※動きやすい服装でお越しください

KACセレクション

地点『グッド・バイ』窓
日時：12月13日（木）−15日（土）
開場18:30 開演19:00
16日（日）開場14:30 開演15:00
会場：講堂
演出：三浦基
音楽：空間現代
原作：太宰治
料金：一般前売3,500円／当日4,000円
学生前売2,500円／当日3,000円
主催・問合せ：合同会社地点
TEL：075-888-5343
E-mail：info@chiten.org

夕暮れ社 弱男ユニット 新作演劇本公演
『サンクコストは墓場に立つ』窓
日時：2019年1月12日（土）19:00
13日（日）14:00／19:00★
14日（月・祝）14:00★
※受付・開場は開演の30分前
★=終演後にアフタートーク開催
会場：フリースペース
作・演出：村上慎太郎
料金：一般前売2,800円／当日3,300円
U-23前売2,300円／当日2,500円 ほか
主催・問合せ：夕暮れ社 弱男ユニット
TEL：090-9696-4946（前田）
※10:00−19:00
E-mail：yowaotoko_unit@yahoo.co.jp

制作支援事業

サファリ・P 第4回公演『財産没収』
テネシー・ウィリアムズの一幕劇を大胆にアレンジ。劇作家の絶望と欲望を演劇化する。
日時：【愛媛公演】12月8日（土）、9日（日）
【沖縄公演】12月15日（土）、16日（日）
【東京公演】12月20日（木）−23日（日・祝）
会場：シアターねこ（愛媛県松山市）、アトリエ銘苅ベース（沖縄県那覇市）、こまばアゴラ劇場（東京都目黒区）
料金：【愛媛・沖縄】
一般前売2,500円／当日3,000円
【東京公演】
一般前売3,000円／当日3,500円
U25 1,500円（各ステージ先着10名）
※WEB予約のみ
主催・申込・問合せ：
TEL：080-9462-3355（サファリ・P）
E-mail：safari.p@stamp-llc.com

松井沙都子 個展『モデルハウス』
日時：12月15日（土）−24日（月・祝）
11:00−19:00
※17日（月）は休館
会場・問合せ：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（中京区）
主催：京都市立芸術大学
TEL：075-253-1509
E-mail：gallery@kcua.ac.jp

TICKETS チケット販売

第252回市民狂言会
日時：12月7日（金）
開場18:30 開演19:00
会場：京都観世会館（左京区）
演目：福部の神 勤入り、察化、鱸包丁、鏡男
出演：茂山千作、あきら、千三郎、千五郎、宗彦、茂、逸平、童司、忠三郎
料金：前売2,500円／当日3,000円
チケット取扱：京都芸術センター、大丸京都店、高島屋京都店、チケットぴあ（Pコード：488-237）
※団体券2,200円（20名以上）は京都芸術センターにて取扱
主催：京都市

神里雄大／岡崎藝術座『いいかげんな訪問者の報告（アサード・おにぎり付き）』友
Co-program カテゴリーA（共同制作）採択企画。
日時：2019年1月16日（水）−18日（金）19:00
19日（土）−20日（日）18:00
会場：フリースペース
出演：神里雄大
料金：一般3,500円、高校生以下1,000円（前売・当日共）
主催：神里雄大／岡崎藝術座、京都芸術センター
※チケット発売：12月1日（土）

みみききプログラム
#3 Kyo×Kyo Today友
京都市交響楽団と京都芸術センターのコラボレーション企画の第9弾。毎回、趣向を凝らしたプログラムが好評の室内楽シリーズです。
日時：2019年2月1日（金）
開場18:30 開演19:00
会場：講堂
料金：一般前売1,800円／当日2,000円
学生1,000円（前売・当日共）
※みみききプログラム共通の半券割引が利用できます
※チケット発売：12月20日（木）

KAC Performing Arts Program 2018 / Traditional Performance
継ぐこと・伝えること62
『享楽×恍恍惚惚（こうこうこうこう）―日本舞踊―』友
日時：2019年2月11日（月・祝）
開場13:30 開演14:00
会場：講堂
出演：吾妻徳陽（中村壱太郎）
料金：一般前売1,800円／当日2,000円
高校生以下500円（前売・当日共）
※チケット発売：12月20日（木）

ロームシアター京都×京都芸術センター
U35創造支援プログラム
KIPPU採択企画

●ブルーエゴナク『sad』
日時：12月14日（金）19:30
15日（土）15:00／19:00
16日（日）15:00
主催：ブルーエゴナク

●安住の地
『ポスト・トゥルースクレッシェンド・ポリコレパッショナートフィナーレ!』
日時：2019年1月17日（木）19:30
18日（金）・19日（土）
14:30／19:30
20日（日）11:00／15:00
主催：安住の地

●akakilike『はじめまして こんにちは、今私は誰ですか?』
日時：2019年2月15日（金）19:00
16日（土）13:00／17:00
主催：akakilike
※チケット発売 12月22日（土）

会場：ロームシアター京都 ノースホール（左京区）
料金：前売3,000円／当日3,500円（各公演）
共催：ロームシアター京都、京都芸術センター、京都市

チケットぴあで取扱いのチケットは、電話、ぴあ窓口、コンビニエンスストア（セブン・イレブン、サークルKサンクス）の専用端末などからご利用いただけます。
WEB：http://t.pia.co.jp　TEL：0570-02-9999

※その他のチケット窓口取扱公演：主催事業および窓印の共催事業・制作支援事業

OPEN CALL 募集

Co-program 2019
共同制作・共同開催・共同実験プラン募集
企画内容から広報、運営、発表まで京都芸術センターと共同で行う先駆的かつ実験的なプランを募集。
事業実施期間：2019年4月1日（月）−2020年3月31日（火）
応募方法：所定の申請書・事業に関する企画書・予算書・活動資料をE-mailにてco-program@kac.or.jpまで提出してください。
応募締切：11月30日（金）

「冬休み芸術体験教室〜写真を撮って、絵にしてみよう〜」参加者募集
日時：2019年1月5日（土）、6日（日）
14:00−16:30
会場：大広間
講師（写真）：木村充宏、小林達也
講師助手（鉛筆画）：神馬啓佑
受講料：無料
定員：各10名
※応募多数の場合は抽選
対象：京都市内に在住又は京都市内の学校に通学する小学1年生−6年生、経験不問
・1月5日（土）：小1−小3
・1月6日（日）：小4−小6
※制作した作品を館内で展示予定
締切：12月15日（土）〔必着〕
申込方法：ウェブサイトもしくは往復はがきに希望日、住所、氏名・ふりがな、学校名・学年、電話番号、保護者名を明記

レザルティスミーティング2019京都
「創造的遭遇−アーティスト・イン・レジデンスの再想像」参加者募集
アーティスト・イン・レジデンス（AIR）に関する国際会議を、京都市、AIRの世界的ネットワークであるレザルティス（Res Artis）財団、文化庁と共同で開催します。
日時：2019年2月6日（水）−8日（金）
会場：京都芸術センターほか
参加費：レザルティス会員16,000円
一般19,000円
一日券 一般8,000円／学生3,000円
申込：レザルティスウェブサイト（http://www.resartis.org/en/meetings/upcoming_meetings/february_2019_-_kyoto_japan/）よりお申し込みください。
締切：2019年1月11日（金）
主催：京都市、京都芸術センター、レザルティス財団、文化庁

※詳細は要項及びウェブサイトをご覧ください

REVIEW

関西圏の公演・展覧会について、
若手レビュアーが月替りで執筆します。

音楽

旋律とノイズの間

岡田正樹

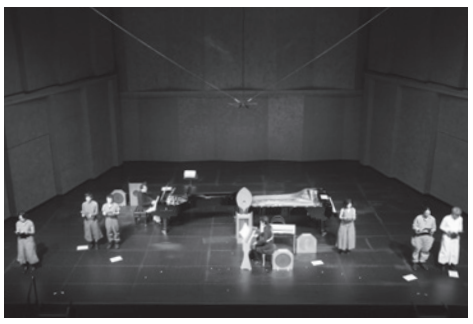
現代芸術の会『音楽の現在 オンド・マルトノを主軸にした実験的コンサート』
9月29日（土）
ロームシアター京都 サウスホール（京都市左京区）

「オンド・マルトノを主軸にした実験的コンサート」という副題に惹かれた。原田節による電子楽器オンド・マルトノのデモンストレーションとでも言うべき第一部。京都を拠点とする劇団、地点が登場した第二部と、一柳慧の二作品が演奏された第三部。楽譜、演奏、楽器、機械、言葉…など、音や音楽の経験を支えるメディア、テクノロジーの諸相を照射するような公演だった。

例えば一柳《ピアノ協奏曲第4番「ジャズ」》二台のピアノ版。ソロは中川賢一、オケパートは中川俊郎である。時おり即興を差し挟むソロはもとより、オケパートさえも、記譜された旋律に触発されて（作曲者の指示にはない）声をあげる。楽譜＝作品に演奏が属する西洋芸術音楽的観念と、楽譜と演奏との隔たりに賭けるジャズ的観念とが混交した、躍動的な演奏であった。

あるいは地点の演劇『スポーツと気晴らし』と『CHITENの近現代語』。前者は秋山邦晴が訳したサティの詩、後者は朝吹真理子の小説がテクストに用いられた。細分化されたテクストは6人の俳優に分配され、発語される。ただし「自然な」分節と発話ではない。例えば助詞の「と」を、異様に強調して伸ばす。その強調は文章の効率的伝達には属せず、言葉の音響的側面を際立たせていた（かといってナンセンスに突入するのでもない）。

そして公演の主軸、オンド・マルトノである。今回、ピアノと並ぶ姿が何故か印象的だった。確かにピアノ的な鍵盤型のインターフェイスを有する。だが似ているようで似ていない。ピアノとのデュオによるバッハ《ヴィオラ・ダ・ガンバ・ソナタ》やカッチーニの《アヴェ・マリア》における、複雑で精妙な持続音やヴィブラートは、むしろ弦楽器的な特性を持つ旋律楽器であることを実感させる。と同時に、楽器の王者ピアノが、かつて弦楽器の奏法を模倣していたというエピソードをも思い出す（伊東信宏編『ピアノはいつピアノになったか?』）。


©現代芸術の会

オンド・マルトノと作曲者自身の力強いピアノの掛け合いを聴かせた一柳の新作《ヴァリエーション》は、プリペアド・ピアノのような仕掛けも導入したかったという。今回は叶わなかったピアノの打楽器的側面の強調は、オンド・マルトノといかなる対照をなしただろうか。再演を期待したい。

地点が放つ言葉の物質性と呼応するオンド・マルトノの音も耳に残った。ディフューザーを媒介とする金属的音響のなかに、《G線上のアリア》が朧気に浮かび上がり、ノイズと旋律の間を行き来する。純然たる旋律楽器としての顔とは異なる、オンド・マルトノの別の姿であろう。

原田の言によると、オンド・マルトノはあくまで楽器として開発されたという。後年の鍵盤の搭載は楽器としての自然さをより強めた。他方で、私たちはオンド・マルトノに今なお摩訶不思議な響きを聴き、機械的な側面を見出す。音楽を伝える楽器としての姿と、露出するテクノロジカルな相貌とのズレ。そのズレにこそ、魅力を感じた。

おかだ まさき／編集者、ライター●モンゴルのホーミーとトプシュール（2弦の撥弦楽器）を訓練中です。ホーミーはいくつか発声法がありますが、今は基本的なスタイルを学んでいるところ。自分の身体からこんな音が出るのかと驚いています。

演劇

わたしのカラダに音を通して

岡田蕗子

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2018
山城知佳子
『あなたをくぐり抜けて―海底でなびく 土底でひびく あなたのカラダを くぐり抜けて―』（パフォーマンス）
10月12日（金）– 10月13日（土）
京都芸術センター フリースペース（京都市中京区）

山城知佳子の展示と上演を京都芸術センターで観た。山城は出身地沖縄を主題に写真作品や映像作品を創作する作家だが、自身を作中に登場させ、他者の記憶を主体的に捉えようとする点が特徴である。今回は2016年に発表された、沖縄戦や済州島の映像にヒューマンビートボックスで効果音を重ねた寓話的映像作品《土の人》（ギャラリー北）と、初期映像作品《墓庭》《OKINAWA墓庭クラブ》《Girls Riding Horses》（ギャラリー南）が展示され、《土の人》の発展的パフォーマンス作品『あなたをくぐり抜けて–海底でなびく 土底でひびく あなたのカラダをくぐり抜けて–』（フリースペース）が山城自身の演出で上演された。

上演空間と鑑賞空間の明確な区分は無く、空間上部に前方へと傾斜する形で張られたスクリーンが一体感と閉塞感を感じさせる。天井からは数本のマイクが下がり、前方右手にはテレビがある居間が、その左側にはDJブースが設置されている。テレビに政治家たちの対談が映ると同じ映像がスクリーンに投影され、次第に《土の人》の映像へと展開する。ヒューマンビートボクサーのShOhが声で作る爆撃音をDJ SHOTAがサンプリング・エフェクトをかけて返していき空間が音で埋め尽くされると、白服の人々がゆっくりと入ってくる。人々の多くは本上演のために集められたエキストラである。山城が採録した沖縄戦の証言者の言葉を、ある者は観客の間に横たわりつつ、ある者は歩き回りつつ呟く。するとその内の一人（Tokiii／Rapper, MC）の声がマイクを通して拡大され、それは歌へと展開する。終盤に差し掛かると人々が手を上に差し伸べ、拍手をする。やがて拍手は一定のリズムを刻み出し、観客の参加を求めるように響き、突如止まる。

歌や呟きはあったものの、その意味内容よりも音の存在感が印象に残った。政治家の硬くて遠い声、ShOhとDJ SHOTAが作る銃撃音に、Tokiiiの語りと歌。そしてこれらプロが作る音の世界に投げ込まれるエキストラたちの呟きが、特に印象深かった。素人性に違和感を感じる生々しい声は、プロたちが作る《土の人》の世界観に裂け目を入れ、観客側へと切り開く。続く拍手音が同調を誘うが、しかしそれが手拍子に変化する時、私は手を叩きたくても叩けない自身の身体に気が付いた。同調ができないことは、私が今まで沖縄と距離を持って生きてきたことの証左のように感じた。映像《土の人》の中の死者を模しているようにも見えるエキストラの身体が、音を媒介に私の中の無責任な無関心さをえぐり出したのである。

山城を含むアジアの芸術家を取り上げた論集『残傷の音–「アジア・政治・アート」の未来へ』を編集した政治思想学者李静和は、その中で音に関して次のように述べる。「人間にまつわる、思考できるあらゆるものが消えるときに、そこに残る澱もののようなものが音かもしれないなって。生きている人と、幽霊でもいいけれど、さまようなにかとの、あいだ。気配ということも含んでいる。それを私は音だと思っている。だから、ある意味、音は記憶になれない」。山城のパフォーマンスは、映像と私の身体を音で結び留めた。最後の手が刻む音は、言葉にならない「さまようなにか」の叫びである。それは確かに私のカラダをくぐり抜け、その感触は未だ去らない。あの音に、どう応えていけるのだろうか。

（10月13日11:00の回を観劇）

撮影：前谷開

おかだ ふきこ／大阪大学演劇学研究室助教●KYOTO EXPERIMENTで毎週京都へ。舞台上の多様な身体に引きずられ、わたしの身体も性も愛もどんどん自由になるかのようです。特にShe She Popが提示した様々な他者と混ざるキマイラの身体像には共祝の拍手を送りたい。

美術

聞きたくない音／声を聞く

雁木聡

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2018
山城知佳子『土の人』（展示）
10月6日（土）– 11月18日（日）
京都芸術センター ギャラリー北・南（京都市中京区）

私たちは日々、無数の声と出会い、あるいは出会い損ねている。人は自分の聞きたいことだけを聞くものだと言われるように、例えば本土の人間と沖縄の人間、戦後生まれと戦争経験者が出会うときも、少なからぬ数の「聞きたくない」声が遮断されてきたかもしれない。本展覧会は、私たちが聞きたくない声と出会い、共にあるための作法を、山城知佳子の作品とともに思考するものであった。その重要な部分を占めていたのが、2016年の映像インスタレーション《土の人》である。

本作品の冒頭、雑草の生い茂った土の上で、泥まみれの人々がひしめき合って横たわっている。その人々の上に、粘土の塊が容赦なく降り注ぐ。砲弾のように、あるいは鳥の糞のように。べちゃっ、べちゃっ、と、決して耳触りの良いとは言えない音を立てながら。やがて人々は、土の塊に耳をあて、そこから聞こえる声に耳を澄ます。世界を構成する不可視の層が、声を通じて輪郭を現していくこの場面は、愛おしさに満ちている。

その穏やかさの対極にあるのが、沖縄戦の映像とヒューマンビートボックスの音声が渾然一体となった場面である。ここでのヒューマンビートボックスは、銃弾や爆撃の音の比喩として機能する一方、決して「本物」ではないのにリアルに聞こえる音声だからこそ、いわゆる記録映像とは異なる鑑賞経験を与えてくれる。いわばそれは、自分の立ち位置を撹乱される経験である。

思えば今回の展示は、鑑賞者を「傍観者」の立場に安住させることはないように見えた。それは、三面のスクリーン上でめまぐるしく変わる映像と、複数のスピーカーから押し寄せる多声的な、持ち主不明の声――韓国語や日本語の詩を朗読する声――の波によって、鑑賞者の視線が奪取され続けるからである。こうした仕掛けの結果として、私たちは、沖縄から遠く隔たった京都でこの作品を見る自分は一体何者なのか、という切実な問いへと導かれるのだ。

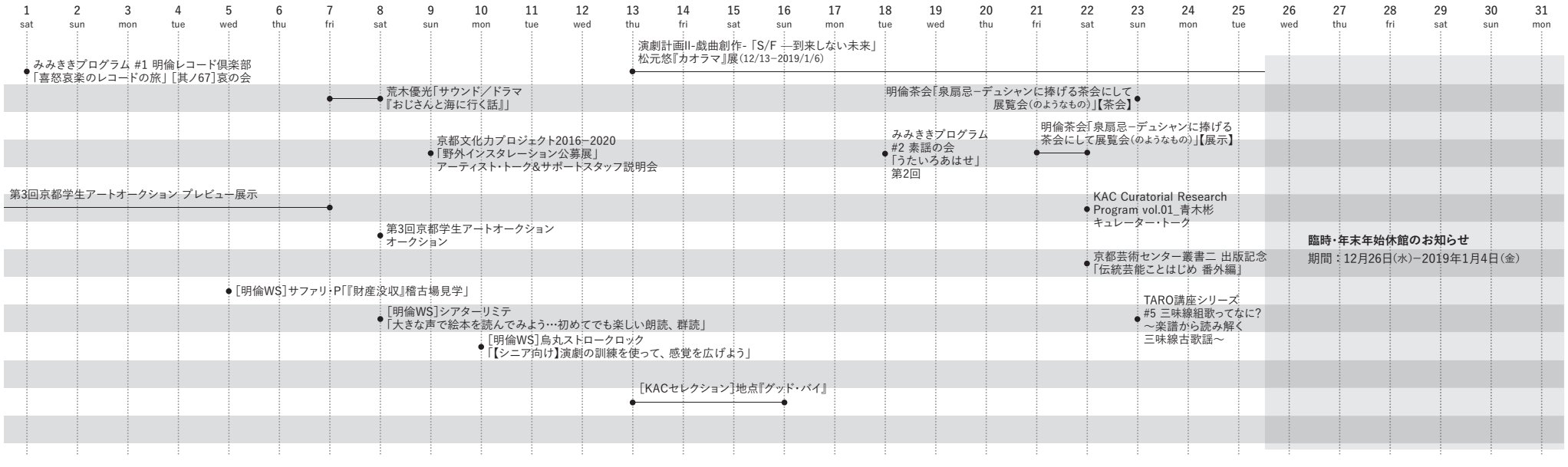
さて、本作品の終盤では、横たわっていた人々が草むらから両手を挙げ、手を打ち鳴らして音楽を奏でる。最初はバラバラだったそれが、次第に統制のとれた響きへと変わる。それは新時代の到来を祝う拍手とも、抵抗の音楽とも聞こえる。この響きを、再び遠い場所へと押し返さないための術こそ、アートと名付けうるのかもしれない。そう思わせる力強さがあった。

最後に付言すれば、本展は山城の制作活動の軌跡をたどる上でも興味深い展示だった。たとえば両足を屹立させ続ける様子を収めた《墓庭》は、《土の人》の拍手の場面を準備するようなイメージを有するし、ユーモラスさと同時に居心地の悪さを巧みに印象付ける点では、亀甲墓や米軍基地のフェンス沿いの風景の中で踊る女たちを描いた《OKINAWA墓庭クラブ》と《Girls Riding Horses》も、山城の記念碑的作品であるだろう。いずれの作品においても、耳触りの良い甘言とは一線を画す、映像芸術の豊かな広がりが見て取れた。

かりき さとし／高等学校教員●書くこと自体の難しさを、ようやく分かってきた気がするこの頃です。

撮影：前谷開

EVENT CALENDAR 12/1 ▸ 12/31



図書室休室日：12月25日（火）

TOPIC 02

演劇計画II －戯曲創作－「S/F －到来しない未来」

松元悠『カオラマ』展

（戯曲：松原俊太郎『カオラマ』第一稿・第二稿）

3ヶ年をかけて劇作家が新たな戯曲を創作する「演劇計画II－戯曲創作－」。戯曲の新たな可能性の提案として、松原俊太郎の戯曲を基にした、松元悠によるリトグラフ作品を展示します。

2019年1月の戯曲完成に向けて、松原俊太郎、山本健介の執筆もいよいよ佳境。創作中の戯曲は第一稿、第二稿はアーカイブウェブサイトにて公開しており、クリエイティブ・コモンズライセンスのもと、自由な上演や二次創作が許諾されています。

しかし戯曲それ自体は、必ずしも舞台での上演のためだけに書かれるわけではありません。それ自体が独立した作品であると同時に、読者それぞれに様々な声や姿、風景を想像させるものです。

今回はリトグラフ作家の松元悠に、松原俊太郎による戯曲『カオラマ』（第一稿・第二稿）に基づく作品創作を依頼しました。松元はこれまで、小さなニュース記事と、自分の知覚した風景や体験を重ね合わせて版画作品を創作してきました。リトグラフ作品を事実の記録と捉え、当事者の感覚を実感しがたいニュースと、自身との関係をつなぎ止める試みの末に生み出されるその画面は、バラバラのモチーフによる構成にもかかわらず、奇妙なリアリティをたたえています。

松原は第二稿において、戯曲構造そのものを作品に取り込み、「読む」という体験を読者に強烈に印象付ける作品へと発展させました。ニュース記事を「読むこと」と、自身との重ね合わせの困難を問題にしてきた松元にとっては、今回の創作はニュースにかわって戯曲が差し込まれることになります。実感しがたい報道に代わって戯曲という強烈なフィクションを読み、読んでいる自分自身も含めて再解釈するとき、彼女はどのような現実を表出させるのでしょうか。松原による戯曲作品から枝分かれし、「カオラマ」が新たな表情をみせます。

リトグラフの図版制作は水と油の作用を利用していて、化学反応に長い時間がかかるうえ、直しが効かない一発勝負。けれども刷りの工程では、複製することも可能です。そんな性質も、どこか演劇創作のことを思い出させます。　谷竜一（アートコーディネーター）

Profile

松元悠（まつもと はるか）
京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画専攻卒業、京都市立芸術大学大学院美術研究科版画専攻修了。個展に、『マル秘と鶏』（SUNABAギャラリー、大阪、2017）、『松元悠展』（Oギャラリーeyes、大阪、2015）。近年のグループ展に、『～次代を担う作家たち4人展～』（京阪百貨店守口店6階美術画廊、大阪、2018）、『間間』（THE TERMINAL KYOTO、京都、2018）、『Lighter but Heavier 重くもあり軽くもある』（C.A.P.、兵庫、2018）。受賞歴に「京都市立芸術大学制作展」奨励賞（2018）、「アートアワードトーキョー丸の内2018 a.a.t.m.2018三菱地所賞」（2018）。ロストック独日協会、町田市立国際版画美術館に作品が所蔵されている。

演劇計画IIアーカイブウェブサイト
http://engekikeikaku2.kac.or.jp/
松原俊太郎、山本健介による戯曲第一稿、第二稿を公開中。

松元悠《顔（北ノ庄町）》（2018）

演劇計画II －戯曲創作－「S/F －到来しない未来」
松元悠『カオラマ』展
会期：12月13日（木）－2019年1月6日（日）10:00－20:00
※12月26日（水）－2019年1月4日（金）は休館
会場：ギャラリー北・南　※入場無料
出展：松元悠（リトグラフ作家）
戯曲：松原俊太郎『カオラマ』（第一稿・第二稿）

TOPIC 03

アーティスト・イン・レジデンスプログラム2018
「公募プログラム」パフォーミング・アーツ部門

「Sound of Kyoto」

招聘アーティスト：マリオス・ヨアンノー・エリア、ニコラス・コスティス
滞在期間：9月20日（木）－12月18日（火）

キプロス出身の作曲家、マリオス・ヨアンノー・エリアと、映像作家のニコラス・コスティスは、9月20日から12月18日の約3ヶ月間京都に滞在し、オーディオビジュアル作品「Sound of Kyoto」を制作しています。

アーティストトークのようす

鵜飼の撮影

Sound of Kyotoは、京都に関係する音と映像でポリトープ（超多面体）を構成し、京都を表現する作品です。楽器の奏でる音のみならず、舞台芸術、伝統、文化、建築、自然など、街を構成する様々な要素を「音」と捉え、その調和を表現することを試みます。

エリアは、来日直後の9月28日に、企画や過去作を紹介するアーティストトーク（於：京都芸術センター）を行い、出演者や制作の協力者を募りました。現在は、コスティスとともに、出演や撮影の交渉を続けながら、参加が決定した交響楽団や合唱団へ向けた新曲の制作、演奏指導、市内各地での録音・撮影と、精力的に活動を展開しています。帰国後は、撮りためた録音や映像を編集し、再来年に作品の発表を目指しています。滞在期間の中盤に差し掛かり、彼らの関心は特に、神社仏閣で用いられる楽器や衣装、建立物を取り巻く庭や自然に注がれています。残りの滞在期間で、彼らが京都でなにを見て、なにを音として聞いているのか、制作の様子は「Sound of Kyoto」Facebook（https://www.facebook.com/soundofkyoto.jp/）でご覧いただけます。

プロダクションには、招聘した2人のほか、アシスタントとしてターニャ、セルゲイ、ロバート、ララ、公募で集まったインターンが6名の総勢12名が参加しています。　堀越芽生子（アートコーディネーター）

TOPIC 04

アーティスト・イン・レジデンスプログラム2018：

エクスチェンジ／A4 Art Museum

招聘アーティスト：王子月（ワン・ジユエ）
期間：10月12日（金）－12月13日（木）

昨年度・今年度と、A4 Art Museum（成都市・中国）とのエクスチェンジプログラムを行っています。日中のアーティストが、異なる文化、環境の中でリサーチ・作品創作に向き合うことで、刺激に満ちた新たな作品が生み出されることを目指します。

LUXELAKES・A4 Art Museum は、3000年の歴史の上に近年も発展を続けている大都市、成都にある文化施設です。展覧会、ワークショップ、リサーチプロジェクト等、中国における現代アートに関する幅広い活動が特徴です。アーティスト・イン・レジデンスにも力を入れており、日本のほか韓国やアメリカ、ドイツなど様々な国々からアーティストを受け入れています。

2018年度のエクスチェンジプログラムでは、日本から美術家の川田知志を成都へ派遣し、9月から11月にA4 Art Museumで滞在制作を行っています。A4 Art Museum からの招聘アーティストとしては、王子月（ワン・ジユエ）が選出され、10月より京都での滞在制作をスタートしています。王は、インスタレーションや映像作品を中心に制作しており、急速な経済発展におかれた中国各地の人々の生活や取り壊された建物に取材した作品に取り組んできました。京都での滞在制作では、地域の人々とともにコミュニティ演劇を創作します。京都の人々が現代社会にどのように暮らしているのか、京都の歴史とどのように向き合い、歴史が同居する時代・文化のなかで、どのような自己の一貫性を保っているのか。こうしたことを理解するために、4回にわたるワークショップを通してコミュニティ演劇のパフォーマンスを創作していきます。

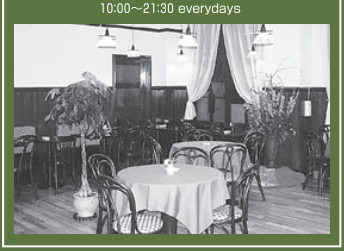
『All solid things have gone away』、2018

第一回目のワークショップでは、参加者の文化に対するかかわり方や京都との関係性などについて問いが投げかけられ、その答えを配置した「アートライフマップ」が描かれました。どのようなパフォーマンスに発展していくのか注目です。　當間芽（アートコーディネーター）

Profile

王子月 / Wang Ziyue（ワン・ジユエ）
1988年中国山東省生まれ。中国杭州市中国美術学院で学士・修士号を取得。現在は上海を拠点に活動している。2017年には上海でCapsule Mall experimental theater を立ち上げた。主な個展に、『Broken Idols』（FenMian Art Space、広州、2016）、『Relax, the Force Has Got Your Back』（Tabula Rasa Gallery、北京、2015）があるほか、コミュニティシアター『Dinghaiqiao Community Theater "Dinghaiqiao Mutual-aid Society"』（上海、2017）など、これまでに様々なプロジェクトを行っている。

Since 1971
MAEDA'S COFFEE
KYOTO ART CENTER 1F
MUROMACHI, TAKOYAKUSHI
NAKAGYOKU, KYOTO
TEL075-221-2224
10:00～21:30 everydays

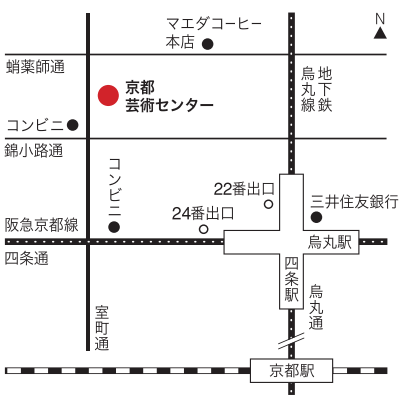


夏休み企画展『感覚のあそび場 ―岩崎貴宏×久門剛史』
2016年7月26日－9月11日
展覧会カタログ　定価 500円（税込）
京都芸術センター窓口、もしくは下記ウェブサイトよりご注文いただけます。
http://www.kac.or.jp/shop/

京都芸術センター

交通案内
○市営地下鉄烏丸線「四条」駅／
阪急京都線「烏丸」駅22番出口・24番出口より徒歩5分。
○市バス「四条烏丸」下車、徒歩5分。

開館時間
○ギャラリー・図書室・情報コーナー・談話室・チケット窓口 …… 10:00－20:00
○カフェ …… 10:00－21:30
○制作室、事務室 …… 10:00－22:00

休 館 日
12月28日から1月4日
※設備点検のため臨時休館することがあります

〒604-8156
京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
TEL：075-213-1000　FAX：075-213-1004
E-mail：info@kac.or.jp　URL：http://www.kac.or.jp/
twitter：@Kyoto_artcenter
http://www.facebook.com/kyotoartcenter